

第52回
平成28年度

わたしの教育記録 入選受賞作品



ユニバーサルデザインの 視点に立った「学習アイコン」 の開発と実践

台北日本人学校（台湾）教諭 三井 一希

1 はじめに

昨年度より筆者は、在外教育施設の一つである台北日本人学校（以下、本校とする）に勤務している。在外教育施設とは、海外に在留する日本人の子どものために、国内の学校に準じた教育を実施することを主たる目的として、海外に設置された教育施設のことである。

本校は小学部と中学部からなり、2016年5月現在、小学部22学級、中学部7学級で編成され、約800名の児童・生徒が学んでいる。世界中に点在する日本人学校の中では大規模校に分類されている。

本校の特色の一つとして、小学部では、日本の公立小学校と同様のカリキュラムにプラスして、小学部一年生から週に1時間ずつ、「英語活動」と「中国語」の時間がそれぞれ設けられていることが挙げられる。もう一つの特徴として、「国際家庭」（両親のどちらか、または両親ともに外国籍）の割合が高いことが挙げられる。筆者の学級（小学部二年生）を例に挙げても、学級内の約30%が国際家庭である。国際家庭の児童は、家庭では英語や中国語を使って会話をしていることが多い。また、たとえ両親ともに日本国籍であっても、生まれた時からずっと台

湾で生活しており、日本を知らないという児童・生徒も見られる。こうした背景もあり、日本語の習得が十分ではない児童・生徒が毎年一定数本校に在籍することになる。

本稿では、ユニバーサルデザインの視点に立ち、日本語の習得が十分ではない児童への支援と併せて学級内の全ての児童が、学習の見通しを持つ上で有効な手立てとなるように開発した「学習アイコン」について報告する。また、学習アイコンを用いた授業実践及びこれらの授業に対する児童、同僚教師、保護者の評価について報告する。

2 学習アイコンについて

2.1 開発の背景

筆者はかねてから、児童が見通しをもって学習に取り組むことの必要性を感じていた。例えば、1時間の授業でどんな活動を行うのか、なぜ今この活動を行っているのかを児童一人ひとりが理解した上で授業に取り組んでほしいと考えている。

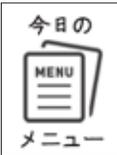
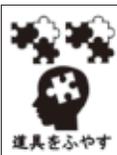
これは、1時間の授業のゴールを学級全員で共有し、一つひとつの学習活動に児童が粘り強く取り組むことで、主体的な学びの過程を実現したいとの思いにもつながる。また、授業を行

う教師自身も1時間の授業の全体像を明確にもった上で児童の指導にあたるべきだと考えている。

これらのことから、以前より授業の冒頭で1時間の授業の流れを児童に話すことを続けてきた。しかしながら、前述のとおり本校では国際家庭の児童の割合が多く、言葉だけではなかなか伝わらないという現実にも直面した。また、黒板に1時間の授業の流れを書くことも試みたが、板書に時間がかかる上、文字だけだと瞬時に理解することが困難であることがわかった。

そこで、著者は駅や空港などの公共空間でよく目にするアイコン表示（ピクトグラム）に着目した。これは例えば、チケットはどこで買えるのか、バスの乗り場はどこにあるのかといったことを絵文字で表したものである。アイコン表示は、言語の制約を受けることなく内容の伝達を直感的に行うことに優れたメディアである。筆者自身も台湾で生活しているので、言語の壁に直面することは日常茶飯事である。そんなときに、視覚的にわかるアイコン表示に何度となく助けられている。こうした経験もあり、授業の見通しをもたせる手段として授業で活用できるアイコンの開発を試みることにした。なお、本稿では授業で使用するアイコンを「学習アイコン」と呼ぶことにする。

表1 現在使用している学習アイコン（一部）

| 学習アイコン | 意味 | 学習アイコン | 意味 |
|---|--|---|---|
|  | 本時の学習目標の前に提示する。本時では、何ができるようになることをめざすのかを確認する。 |  | 本時はどのような学習活動を行うのかを示す。この後に、それぞれのアイコンが続く。 |
|  | 特定のペアで話し合い活動を行うことを示す。 |  | 授業中に動画を視聴する活動があることを示す。 |
|  | 話し合う相手を教師が特定せずに、児童に委ねて話し合い活動を行うことを示す。 |  | 教科書やドリルの問題を解くことを示す。 |
|  | 自力解決を行うことを示す。 |  | 授業の理解度を測るためにチェックテストを行うことを示す。 |
|  | ペアで意見をまとめたり、協働して課題を解決したりすることを示す。 |  | タブレットPCを使うことを示す。 |
|  | グループで意見をまとめたり、協働して課題を解決したりすることを示す。 |  | 意見共有の際に、他者の考えから見識を広げることが意識させる場面で提示する。 |

2.2 ユニバーサルデザインの視点

ユニバーサルデザインの考え方を教育場面に適用する動きはこれまでも行われてきた。「授業のユニバーサルデザイン研究会」では、特別支援教育の考え方を通常学級の授業づくりに生かし、すべての子どもが楽しく「わかる・できる」授業を提唱している（授業のユニバーサルデザイン研究会 2010）。また、桂（2011）によると、特別な支援を要する子が「わかる」ことを本気で考えて授業をつくることは、全員が「わかる」ことに通じる授業のユニバーサルデザインになるとし、そのための指導の工夫の一つとして、授業を視覚化（ビジュアル）することを挙げている。

また、花熊（2011）は、特別支援教育の観点に立った通常学級の授業づくりを、「つまづきのある子にとって、〃ない〃と困る支援〃は、他の子にとっても、〃ある〃と便利な支援〃だ」というユニバーサルデザインの発想に基づく取り組みを提唱している。その中で、ポイントの一つとして「見通しをもてる授業」を挙げ、授業のはじめに活動の全体像（流れ）を示し、その授業で何をするかの見通しを子どもたちもてるようにすることが重要であり、それには視覚的な手がかりの使用が有効である、との考えを示している。

学習アイコンの開発にあたっては、桂（2011）の授業を視覚化（ビジュアル）するという知見、花熊（2011）の見通しをもてる授業には視覚的な手がかりの使用が有効であるという知見を支持し、特定の子だけに対する支援ではなく、〃すべての子がわかる〃というユニバーサルデザインの視点に立った。

2.3 開発した学習アイコン

学習アイコンは、学習の見通しをもつためのものである。そこで、授業でよく行う学習活動や教師の指示を洗い出し、その一つひとつの活動にアイコン表示を当てはめることで学習アイコンの開発を行った。当初は、アイコンだけの表示であったが、学習アイコンの数が増えてきたり、類似したアイコンがあったりすると児童も教師も混乱することがわかり、補助的に文字を併記することにした。黒板に掲示するため、児童からのフィードバックを得て大きさや形を何度か改訂した。その結果、現在は縦20cm×横12cmの大きさで長方形となった。

現在授業で使用している学習アイコンは約30種類ある。その一部と意味を紹介する（表1）。アイコンを作成した後は、児童とその意味について共通理解を図り、何を意味しているか全員が説明できるようにした。

2.4 活用場面

授業では、どのように学習アイコンを提示しているのかを実際の活用場面と共に紹介する。（事例1）小学部二年生算数での活用（図1）



図1 算数における学習アイコンの活用

本時では、授業の冒頭に解説動画を視聴し(1)、その動画の内容についてグループで説明し合い(2)、本当に個々が理解できたのかを自力で問題を解くことで確認する(3)、流れである。その後、自分で解いた問題について再度グループでディスカッションを行い(4)、解答および解法について確認をする時間を設けている。最後に、理解度を確認するためにチェックテストを行い(5)、

ふり返り（本学級では、学びのふり返りを略して「まなふり」と呼んでいる）を行う(6)、流れを示している。

授業の冒頭に全体の流れを示すので、児童は1時間の見通しもちやすくなる。また、なんのために動画を視聴するのか、グループで考えた後にどんな活動があるのかなどがわかることで、児童は一つひとつの学習活動に対する意味づけを行いやすくなる。一方、教師は、事前に検討し、児童に示した流れからブレることなく、常に黒板の表示に基づきながら授業を進めることができる。また、それぞれの活動に対して目安時間を表示することで、教師と児童の双方が時間を意識して授業に取り組むことが可能となる。

〈事例2〉 小学部二年生図工での活用(図2)

本時では、何ができるようになることをめざすのかを、「今日のゴール」として提示した(1)。その上で、そのゴールにたどり着くための「メニュー」として(2)、まずは粘土を使った作品を「ひとりで考え(作り)」(3)、自分が作った作品を「お店屋さん」(いわゆる、ポスターセッション形式の発表)で友達に紹介する(4)。このときに、説明する活動であることを児童に意識させるために「せつめい」というアイコンを提示した(5)。このアイコンには、話し手と聞き手が守るべき学級のルール(相手に聞こえる声で話

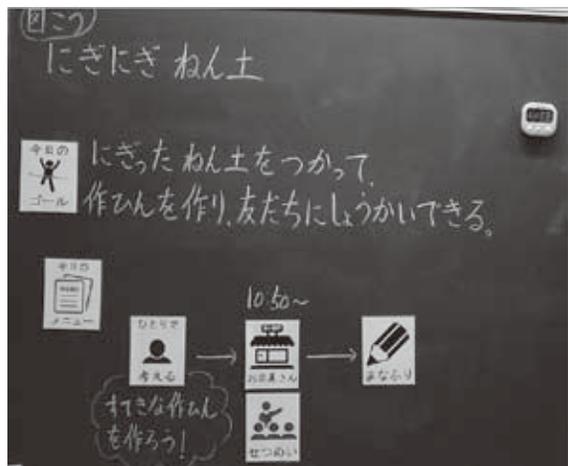


図2 図工における学習アイコンの活用

す、話し手のほうを見る等)を遵守して説明活動を行いましょう、という意図が込められている。そして、前述したようにふり返りとしての「まなふり」を行う(6)、という流れを示している。児童は、ただ作品を作るのではなく、その後説明活動があることが黒板を見ることで常に意識できる。また、説明活動の開始時間を明示することで、作品を作り終わる時間の見通しもちやすくなる。

このように、学習アイコンを活用することで視覚的に授業全体の見通しをもったり、一つひとつの学習活動に対する意味づけを行いやすく

なったりすることが可能となった。そして、日本語の習得が十分ではない児童に限らず、学級内のすべての児童がわかる授業へとつなげられるようになったと考える。また、教師にとっても予定していた授業の構想からブレることなく、授業を進められるようになったと感じている。

3 同僚教師への広がり

3.1 学習アイコンの共有

学習アイコンの導入からしばらくして、筆者の学級の黒板を見た同僚教師や筆者の授業を見た同僚の教師から学習アイコンについて質問を受けた。アイコンを譲ってほしいとの声が多数寄せられたりした。また、筆者自身も学習アイコンを授業に導入して、児童が以前よりも見通しをもって学習に取り組むようになったことを実感していた。そこで、同僚教師の役に立ち、何より見通しをもって主体的に学習に取り組む児童が増えてほしいとの願いで学習アイコンを同僚教師間で共有することにした。

当初は、印刷した学習アイコンを希望する同僚教師に譲っていたが、それぞれの学級や担当教科で異なるアイコンや文言を使用したいとの希望があった。そこで、ワープロソフトで作成したアイコンを職員室の共有サーバに保存し、

職員なら誰でもアクセスして、編集や印刷ができるようにした。また、本校の研修主任が職員向けに発行している「研修だより」に学習アイコンの取り上げてもらい、職員間で情報共有できるようにした。

3.2 オリジナルアイコンの作成

共有フォルダを使って、同僚教師間で学習アイコンを共有したところ、オリジナルのアイコンを作成する教師が出てきた。その中から、日常的に授業で活用されているアイコンを紹介する。(オリジナル例1) (図3)



図3 書写の時間に使われている学習アイコン

書写の専科教師は、筆者が作成した学習アイコン以外にも「しよしゃたいそう」、「せんせい がチェック」、「ぬりトレ」といったアイコンを自作した。それぞれのアイコンは、書写の授業の流れに沿って必要なアイコンとのことであった。専科教師は、毎時間黒板に学習アイコンを提示することで、1時間の流れを見直し確認している。

〈オリジナル例2〉 (図4)

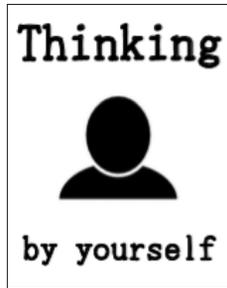
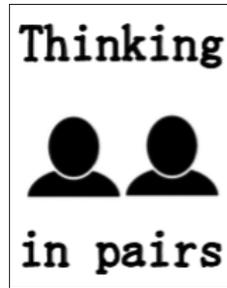
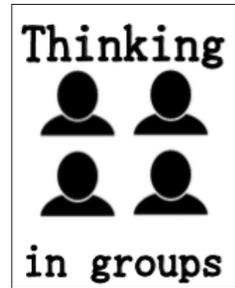


図4 英語活動の時間に使われている学習アイコン

低学年から高学年まで違和感なく使え、学年を問わず日々活用しているとのことであった。

4

学習アイコンの効果と考察

4.1 児童の評価

英語活動の専

科教師は、著者が作成した学習アイコンの日本語表記を英訳して授業で活用している。一人で

英文を考える際、ペアでスピーキ

ングの練習をする際、グループ

でスピーチの発表をする際など、

表をする際など、活動の流れを見

童に示すのに学習アイコンが便利

だと言っていた。また、アイ

コン表示なので、

低学年から高学年まで違和感なく使え、学年を問わず日々活用しているとのことであった。

まず、授業に学習アイコンを使うことで、児童にどのような変化があったのかを児童へのアンケート調査の結果から考察する。著者の学級の児童30名を対象に、学習アイコンを使い始める前の4月と学習アイコンを使い始めて約3か月後の7月との2回に分けて5件法のアンケート調査を実施した。本学級では、ほぼ毎時間のように学習アイコンを使って授業を行った。質問項目及び回答は表2のとおりである。

4月と7月の平均値を比較すると、見直しをもって学習に取り組んでいる児童が増加していることがわかる。また、どちらの質問項目においても学級内ではらつきが少なくなっていることがわかる。これ

表2 アンケート調査の質問項目と回答結果 (n=30)

| 質問 | 4月平均値 (標準偏差) | 7月平均値 (標準偏差) |
|--|-----------------|-----------------|
| あなたは、1時間の授業の中でどんなことをするのか授業のはじめにわかっている | 3.60 (1.08) | 4.40 (0.61) |
| あなたは、なんのために話し合い活動やチェックテストなどをするのかわかっている | 3.67 (1.16) | 4.47 (0.62) |

(5 よくあてはまる 4 ややあてはまる 3 どちらともいえない 2 あまりあてはまらない 1 まったくあてはまらない)

より、支援を必要としている児童だけではなく、学級内の他の児童にとっても学習アイコンが有効に作用していることが明らかとなった。

4.2 同僚教師の評価

続いて、学習アイコンを日常的に取り入れるようになった同僚教師からの評価を要約して紹介する。

『学習アイコンを提示することで、児童の意欲の高まりを感じる。学習の見通しをもつことの大切さを再認識した。』(小二担任)

『児童から、「このメニューだとグループで考える、だね」「このメニューだとみんなで考えるほうがいんじゃない」という会話が自然に出てくるようになった。』(小六担任)

学習アイコンを取り入れている同僚教師からは、前記のとおりおおむね良好な評価を得ている。

4.3 保護者の評価

最後に、参観日に学習アイコンを見た保護者から届いた感想を要約して紹介する。

『途中から授業を見ましたが、授業の流れがすぐにわかりました。』

『この1時間の授業をどのような流れで行い、何をめあてにしているのかを絵を使ってまず子

どもたちに伝えられていたので、大変わかりやすかったです。』

学習アイコンに関して、保護者からも好意的な評価を得ることができている。

5 まとめと今後の展望

本稿では、ユニバーサルデザインの視点に立

ち開発した学習アイコンについて報告した。学習アイコンについては、児童、同僚教師、保護者からこれまでのところ良好な評価を得ている。また、何より日本語の習得が十分ではない児童たちが、以前より見通しを持って授業に取り組みようになったことが大きな収穫だと感じている。

今後は、児童の実態に合わせてアイコンの内容を再検討していく予定である。そして、アイコンをより多くの教師に使ってもらえるようにその効

果を伝えていきたい。

【参考文献】

- ・ 授業のユニバーサルデザイン研究会編著(2010) 授業のユニバーサルデザインー全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくりー / 東洋館出版社
- ・ 桂聖(2011) 国語授業のユニバーサルデザインー全員が楽しく「わかる・できる」国語授業づくりー / 東洋館出版社
- ・ 花熊暁(編著)(2011) 小学校ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり / 明治図書

受賞の言葉

三井 一希



このたびは、大変栄誉ある賞に選出いただきありがとうございます。自分の実践が一つの形となり、評価していただけたことに感謝申し上げます。

本実践は、学級内のすべての児童が学習の見通しをもつ上で有効な手立てとなるように開発した「学習アイコン」に関するものです。学習アイコンは、台湾での生活において、言語の壁に直面した際に助けられた私自身の生活体験から着想のヒントを得ました。海外での生活は、これまでの「当たり前」が「当たり前ではない」ということを痛いほど思い知らされます。

逆を考えると、日本や台湾に住んでいる海外にルーツをもつ子どもたちは、言語や生活環境の面で多くの困難を抱えていることは容易に想像できます。こうした子どもたちへの支援を含め、同じ学級内にいるすべての児童が、「わかる・できる」授業をつくっていきたくと考えています。そのために、あると便利な支援とは何かについて、これからも考え続けていきたいと思ひます。

最後になりましたが、いつも温かくご指導をしてくださる重山校長をはじめ台北日本人学校教職員の皆様、台湾での生活を支えてくれている家族に感謝の気持ちを伝えたいと思ひます。